

大きな羊のみつけかた  
「使える」美術の話

齋正弘 著



仙台文庫



## 目次

まえがき

大きな羊のみつけかた 7

美術を使おう

保育園児と大学生のための「美術を考える授業」 16

小学生と中学生のための「美術って、本当のところどうなんですか？」 63

美大の学生のための「写真機ができて絵を描くことを続けるのはなぜか？」 91

美術／図工の先生のための「美術／図工教育は何のためにあるのか？」 95

美術館を使おう

美術としての教育、教育としての美術 宮城県美術館から見た美術教育 104

学校と美術館の連携のために 144

表現行為としての鑑賞 本物を見ることが、何を見ることがなのか

155

美術であるということ 障害者美術展に関わって 162

## 質問に答えて

美術の使い方・実践編 174

あとがきとして 齋正弘のできかた 197



まえがき

大きな羊の  
みつけかた

「美しい」の美という漢字は、羊という字に、大きいという字が組み合わさってできている。羊が大きいので、美、ね。だいぶ昔の中国の人たちが考え出した。羊が大きいのが、美しいのである。

もちろん、文字は、言葉よりだいぶ後にできた。美についてまず最初にあったのは、「うわあ!」とか「おおっ!」とか「ひゃあ!」とかつい言ってしまふような「感じ」のはずで、それを、誰か、顔をつきあわせて話ができない所にいる人に伝えるため、文字が作られた。で、美という感じを伝える漢字は、羊と大きいを組み合わせるといいのではないかとということになったようなのだ。

しかし、本当にいいのか、これで。羊が大きいと、美しいのか。

美が、このような形の漢字になった理由についての研究は、もちろん様々ある。何しろだいぶ前のことなので、なかなかはっきりとしたところは誰にもわからないようなのだ。

数ある理由の中で、私の好きな考え方はこうだ。

羊が大きいと、まず、うまそう、と、当時の人は思う。美しいという感じは、実は、うまそう、と、深く結びついている。ついで、その当時、羊は、生贄いけにえの象徴でもある。美は、その生贄が大きいのだ。生贄は、神様の前で首を切られる。そして、このぐらい血が出たので、今年は豊作だとかがわかる。あなたは、大きい羊の首が切られるところを見たか。私は、ちよつと弱いな、そういうの。でも、ちよつと見たい気も、本当は、する。

たぶん、その光景を見るときに起こるだろう、一人一人まったく違って、しかし、人間という種としては、多くの部分で共通もする、広く多様で深い、複雑な心の動きの総合が、「美」と名付けられたのだ。そう考えれば、「美」は、「美しい」の美というより、「ビツクリ」のビに近い。どうだろう、この考えは。

自分の人生を組み立ててゆく途中で、様々なはらはらどきどきのビツクリに私たちは出会い、普通、何とかかんとかつじつまを合わせて、自分と社会の関係を受け入れ、身の回り世界の境界を少しずつ拡大してゆく。美がビツクリのビだと考えれば、美は、私たち

がそのつじつまを合わせてゆくときの力強い相棒の名前だったのだ。そう、波風たつての人生こそが、私たち人間の、元々のやり方ではなかったのか。

美がビツクリのピなのだと思えば、様々なことがわかりやすくなる。「美しいもの」を見たときに、私たちは「うわあ」とビツクリする。そして「汚いもの」を見たときにも、「ひゃあ」とビツクリする。すぐく上手に描いてある絵を「いやはやなんとも」とビツクリ見つめ、これでもかと下手な絵も、「なんともこれは」とビツクリ見つめる。

美しいも汚いも、上手いも下手も、ビツクリするところまでいきついたものに、私たちは、平等にビツクリし、感嘆して見つめる。実はこのあたりが、近代の美術が、個人の自覚を持った市民の、様々な試行錯誤を経た上でいきついたところなのではなかったか。人間は、みんな違うのだから、一人一人の美も、もちろん違う。しかし私たちは同時にみんな人間で、あるものには、共通して心を動かすことができる。へそ曲がりの人でも、その人なりに心は動く。

美術館に来て、「何で、こんな汚いのや、どう見たって下手な絵が、飾ってあるのだ！　こんな俺でも描ける！」と怒る人がいる。怒らないまでも、結構みんな思っていない？

ほんの200年程前までは、世界中に本物の王様なんかがいて、私たちの美を、その一人決めてくれていた。「うちのかみさんが美人！」とかね。でも、私たちは、そういうシステムはやめて、みんなで相談していろいろなことを決めることにしたのだった。それ以降、美は、みんなそれぞれが決めていいことになっている。「うちのかみさんこそが美人！」なのだ。

でも、表現は大きく拡大しても、心が動くことは、私たちに共通して未だにおこる。美術館は、そのきっかけとなったビックリを描きとめたものをとって置き、後々いつでも誰でも確認できる所として機能し、存在する。

2011年11月、宮城県美術館は開館30周年を迎える。社会はこの30年と限ってみても、信じられないほどのスピードで変化してきた。その中で、いやその中にいるからこそ、私たちが忘れてはいけないビックリについて思いをはせるために、美術館に出かけみる、というのでもないかしら。

